

Title	C. Moulton; Similes in the Homeric poems (Hypomnemata, 49)
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1985
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.1 (1985. 8) ,p.105- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19850800-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

C. Moulton;

Similes in the Homeric Poems

(*Hypomnemata*, 49).

Pp. 163.

Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen

1977. DM. 28.

真下 英信

イーリアスを初めて繙いた人は、頻出する比喩とりわけ直喩から強烈な印象を受けるのではなからうか。直喩は二三語のものもあるが、時には二十行を超えるものもあり、内容的にもライオンや鳥などの諸動物、洪水や風、流星などの自然現象等その対象は極めて多岐に亘り量的にも質的にもまさに巨大な世界を展開している。

比喩についてはすでにアリストテレスも論じている(*Rhet.* III. 4. 1406 b 20ff.; *Poet.* XXI. 1457 b 6ff.)。イーリアスの古注でも比喩の是非や説明がなされてくる(eg. *H. I.* 47, 54; *XII.* 132, 257)ことからして、古来比喩が読者の関心を引き付けていた事実が窺える。

今世紀になってからもホメーロス研究の中心テーマとは言えない

批評と紹介

らが、比喩研究は間断なく続けられてきた。A. L. Keith, *Simile and Metaphor in Greek Poetry from Homer to Eschylus*, Menasha 1914; H. Fränkel, *Die homerischen Gleichnisse*, Göttingen 1921 (repr. 1977); W. B. Stanford, *Greek Metaphor*, Oxford 1936 (repr. 1972) など二三の専門書を人はすでに思い浮かべることが出来る。研究論文に至っては、枚挙に遑なしと言えば誇張になるかも知れないが、数多く発表されてきた *AJP* の最新号にも直喩の研究論文が掲載されている(R. Friedrich, "On the Compositional Use of Similes in the *Odyssey*", *AJP* 102 (1981) p. 120-137)。

二十世紀の直喩研究を回顧して最も重要なのは、上掲の Fränkel の本と口承叙事詩の本質を明らかにした M. Parry の諸研究であろう(A. Parry, ed., *The Making of Homeric Verse*, Oxford 1971 参照)。前者は直喩と直喩されるものが似ているか否か、いわば Vergleichungspunkt を求めて論じていく従来の研究を徹底的に批判し、むしろ直喩の Stimmung や Vergleichsfläche に着目すべきとの鋭い指摘を行った。今日に至る直喩研究は大かれ少なかれ彼の見解をめぐる賛否問題として捉えられる。彼の研究はその後、G. Jachmann, *Der homerische Schiffskatalog und die Ilias*, Köln und Opladen 1958 & D. J. N. Lee, *The Similes of the Iliad and the Odyssey Compared*, Melbourne 1964 などによって解釈が象徴的過ぎるとかテキストの読み過ぎである等の批判を受けているが、今日でも直喩研究上の出発点であるとするに異論はあるまい。

一〇五 (一〇五)

他方 Parry の研究成果も直喩研究に多大な影響を与えた。例として J. A. Notopoulos, "Homeric Similes in the Light of Oral Poetry", *CJ* 52 (1957) p. 323-328 & W. C. Scott, *The Oral Nature of the Homeric Simile*, Leiden 1974 のように直喩は全て口承によるもの研究もなされている (cf. G. S. Kirk, *Homer and the Oral Tradition*, Cambridge 1976 p. 6)。

ところで直喩をめぐる諸問題とは何か、簡単に述べよう。まず最初に、直喩は何時作られたのか定かでない。単純なものから複雑なものへと発展したと思われる (Fränkel *op. cit.* p. 111; G. P. Shipp, *Studies in the Language of Homer*, Cambridge 1972 p. 208-222. 特に p. 211) が、ある人は直喩の始は既成のものが使用されているのではないか (G. Murray, *The Rise of the Greek Epic*, Oxford 1907 (repr. 1967) p. 249) として、またある人は逆に短くのは別にして長い比喩はヘーメロス自身の作として (T. B. L. Webster, *From Mycenaean to Homer*, London 1958 (1964²) p. 235; G. S. Kirk, *The Songs of Homer*, Oxford 1962 p. 202)。² またある人は叙事詩の発展史上末期に直喩は重要になったとしている (C. R. Beve, *The Iliad, the Odyssey and the Epic Tradition*, New York 1966)。³ Lee *op. cit.* p. 28 はさらに論を進めて、直喩はオデュッセイアが作られた時のもので、イリアスのそれは全て後に挿入されたとの極端な説を展開している。また、分析派の中には繰り返し返されている直喩は挿入によるかテキスト自体が新しい証拠であると考えている人 (e.g. W. Leaf, *The Iliad*, London 1900-1902 vol. II, p. 122 f.

263-268 の注を参照) もいる。

次に直喩と物語の関係も大きな問題である。両者は、うまく融合している (K. Riezler, "Das homerische Gleichnis und der Anfang der Philosophie", *Die Antike* 12 (1936) p. 253-271) のか、それとも両者各々別次元の世界を形成している (Scott *op. cit.* p. 54; M. D. Reeve, "The Language of Achilleus", *CQ* 23 (1973) p. 193) のか議論の分かれる所である。

また面詩における直喩の機能についても戦闘場面の描写の単調さを救った (C. M. Bowra, *Tradition and Design in the Iliad*, Oxford 1930 (repr. 1968) p. 123; Kirk, *Songs of Homer* p. 346-347; Stanford, *op. cit.* p. 128) とか、聴衆の関心を引きつけるため (J. A. Scott, *The Unity of Homer*, Berkeley, California 1921 p. 125) とか様々な論がなされている。

さらに直喩の置かれた位置や直喩の分類 (E. G. Wilkins, "A Classification of the Similes of Homer", *CW* 13 (1919/20) p. 147-150, 154-159; M. Coffey, "The Function of the Homeric Simile", *AJP* 78 (1957) p. 113-132) とは何か意味が認められるべきか否かも論ずべき問題である。

最後に直喩の世界は具体的にどのような時代、例えば Geometric Age (A. Heubeck, *Die homerische Frage*, Darmstadt 1974 p. 210) や作者の時代 (Shipp *op. cit.* p. 212-214) が反映しているのか、それともそもそも直喩の世界などは存在しない (Fränkel *op. cit.* p. 104; Murray *loc. cit.*) のかも大きな問題である。このように直喩についても様々な問題が提起されているが、こ

ここに紹介する本書の目的は、(1) 直喩はすでにある物語に付加されたりして出来たものではない。直喩と物語は緊密に融合し合いながら統一ある作品を作っている。(2) 統一派の立場に立ちながらも、イーリアスとオデュッセイアーの構造的な相違を認めたとで両詩の直喩の使用法の違いを説明する点にある。全体は五章からなり、初めの三章はイーリアス、残りの二章はオデュッセイアーを論じている。次にその内容を簡単に紹介しておこう。

第一章は本書の主題である直喩と物語の緊密性を証明するための準備作業として、イーリアスに見られる直喩の展開方法を検討する。著者によると、直喩は物語から独立した映像を作っているのではないし、物語特に戦闘場面の単調さを救うために挿入されたものでもない。また聴衆の感情を高めるための装飾でもない。むしろ、直喩はホメーロスのな映像を作り出す重要な一手段として用いられている。詩人はある直喩を用いるとその主題や用いられている言葉を繰り返しながら直喩を進展させていき、全体としてまとまりのある一連の映像を作り出していく。そしてこの連続した直喩をもって物語の主題の発展描写を補足強化していく。

かかる直喩の用例としてまず XI. 297-298 と XI. 305-308 のように一対となって使用されている型が指摘される。これは同一の直喩(風)を同一の対象(ヘクトール)に用いながら物語の展開を強化している用例である。

第二の型は XIII. 39 と XIII. 53, XIII. 178-180 と XIII. 389-390, XIII. 795-799 と XIV. 16-19 のように同一素材の直喩

を用いながらも直喩の対象が相異なる場合である。この型は物語の対比や調和を作り出す効果を持つ。

直喩の第三の型は、直喩の主題や語を手掛かりにして次々と新しい直喩を展開していく場合である。例えば II. 455-483 の比喩で歌われている七つの直喩は相互に無関係に羅列されているのではない。各々の直喩の展開は、その映像を拡大するための詩人の巧妙な技巧に裏打されている。すなわち、ギリシア軍の武器の輝きは遙か彼方から展望される山火事の直喩へと極めて自然に移行している。そして火事の直喩は「動き」と空に焦点を置くが、視点を空から大地に移すことによって自然と鳥の直喩に移る。以下同様な技巧の基に直喩が展開している。

第四の型は直喩が散在しながらも仔細に見ると共通の主題があり、上述の型と比較すると弱いながらも全体を首尾良くまとめる機能を果している場合である。例えば XVI. 297-300, 364-365, 384-392 は雲、風、山などの主題で、II. 87-90, 144-148, 209-210, 394-397 は陸や海の主題で貫かれている。かかる技法は XI. XII. の動物の直喩の如く(狩↓犬↓熊↓鹿等)次々と場面を展開するにあたり広範囲に用いられている。

ところで、直喩を重ねながら一層大きな映像を展開していく技法は直喩の世界にのみ独立して使用されているのではない。物語の展開と極めて緊密な関係を保っている事実が次章で論証されていく。

第二章は一連の直喩が物語と如何にうまく調和しているかを戦闘場面での直喩を中心に検討する。論じる箇所は IV, V, XII,

XV, XVII. と XXII. である。

著者はまず直喩の機能を論じ、従来一般に認められている直喩が物語の転換点に用いられているとする説や戦闘描写の単調さを避けるために用いられているとの説を全面的に退ける。

初めに IV. が検討されるが、イーリアスには著者の言う dynamic symmetry が認められる。これに J. L. Myres, "The Last Book of the *Iliad*", *JHS* 52 (1932) p. 264-296 などが指摘するような物語の構造の機械的な対称性ではなく、もっとゆるくより自由な形の対称性を作りながら次々と物語を展開していく技法である。

かかる技法を念頭に置きながら、IV. 482-487 の直喩を考えると、直喩は物語の dynamic symmetry を強化する機能を持ち、かつ両者はうまく統一されていることが分かる。直喩は物語の単調さを救うために用いられているでもないし物語の転換点を示すものでもない。また、V. のライオン、群雲、川の直喩もただ散在しているのではなく、物語の dynamic symmetry の展開と密接に関係している。

第三章はパリスとメネラオス、そしてアガ멤ノン、最後にアキレウスとパトロクロス論しながら性格描写における直喩の役割を検討する。著者によると、詩人は登場人物のメネラオスに用いられているライオンの直喩 (III. 21-28, 449) で彼の性格を巧みに表している。他方、パリスは神にも似たと称されながらも蛇に驚く人に比せられており (III. 33-35)、これまた彼の性格をうまく描写している。と同時に、両人の性格の相違、対照が直喩によ

って明示されている。

ヘクトールは手斧に比せられている (III. 60-63) が、この直喩は英雄たる彼に相応しいだけではない。兵士が倒れゆく様はしばしば木が倒れる場面に比せられる (e.g. IV. 482ff., V. 560)。木と斧から生れる映像を重ねることによって雄士ヘクトールの性格が巧みに示される。同時にこの直喩は VI. にみられる細やかな愛情を持った父としての性格を際立たせ、さらには XXII. の死の悲劇性を一層高める効果を与えている。

アガ멤ノンの性格描写においても直喩は重要な役割を与えられている。しかもこの役割は詩人が意図的に与えているのである。アガ멤ノンには様々な直喩が付けられている (e.g. XI. 27, 155 etc.) が、戦士としての勇敢さを示すにはライオンのそれが好んで用いられている (e.g. XI. 113-119, 172-176 etc.)。従って、傷を負い退却するアガ멤ノンに付けられている陣痛の苦しみの直喩 (XI. 269-271) は、ライオンのそれに比較すると極めて皮肉な効果を果している。

ところで、イーリアスの終結部分ではアキレウスが重要な役割を果しているためか、XVIII, XXII. にある直喩七十二の中で四十一はアキレウスに係わっている。多くの登場人物の中でも彼が最っとも多く直喩を付せられている (五十例中八例) が、これも詩人の個人的な関心の反映と著者は考えている。

アキレウスに係わる直喩は親子、火、神、ライオンの四種に大別出来る。親子の直喩は彼以外にも適用されているが、彼に付せられた場合 (e.g. IX. 323-324, XVIII. 56-57 = 437-438) はそ

の人間的な側面がうまく表現されている。他方、戦闘での非人間的とも言える怒りには火の直喩が用いられている (e.g. XVIII. 207-213, XIX. 17, 366, 375, 381, 386 etc.)。やがて XXI. 522-525 や XXII. 410 の如くに単に怒りを表すのみか聴衆にトロイの落城を予知させる場合もある。

火とならんで、アキレウスの超人的な力と怒りには神が比せられる時がある。しかし、この二つの直喩は XXII. 以後には大体用いられていない。これはヘクトールの死後のアキレウスの心の有様が反映されていると思われる。かかる直喩の変化は、登場人物の心の状態を詩人が正確に把握する能力を保持していたことを示す。ライオンの直喩は戦士としての面を示すに用いられている (e.g. XX. 164-173, XXII. 262-264, XXIV. 41-43)。

本章の最後はアキレウスとプリアモスの出会いの場面の直喩 (XXIV. 480-484) を論じる。意味がかならずしも明確でないこの直喩を著者は XXIII. 85-90 と結合して解釈している。この見解の正否を評者は判断しかねるが、関心ある読者は本書の p. 114-116 を参照されたい。

第四章からはオデュッセイアを論じる。まず始めにイーリアスと比較しながら直喩の数量、分布状態、内容などを検討して両詩の直喩の量的差異を簡単にまとめた後に、質的な相違が論じられる。

イーリアスに典型的に認められた直喩を次々に発展させていく手法 (associative technique) はオデュッセイアにもある (e.g. VI. 102-150-152; VIII. 115-117-516-518 etc.) が、前者

に比して遙かに少ない。また、dynamic symmetry もイーリアス程重要な意味を持っていない。かかる直喩機能の相違は両詩の構造的相違に起因する。すなわち、イーリアスでは類似した様々のエピソードを重ねながら物語が発展し直喩はこれらの物語を結び付ける大きな役割を果たしているのに対して、オデュッセイアでは物語自体が明確な目的のもとに語られていてそれ自身統一ある世界を形作っている。従って、オデュッセイアでは直喩が物語を結合していく必要はない。それ故に、dynamic symmetry は大きな役割を与えられていない。むしろ、個々の主題の特徴をしっかりと表現したり強調、発展させるために直喩が用いられており、直喩と直喩される世界がうまく整合した世界が創り出されている。因に、両作品の構造的な相違に基づく直喩の機能の相違はかならずしも作者が別人であるために生じたのではなく、むしろ一人の秀でた詩人の手によって両詩とも作られたとの統一派的な見解が主張されている (p. 11)。

オデュッセイアの直喩の第二の特徴は、物語では明瞭に述べられていない世界を象徴的に表現する点である。例えば IX. 318-394 は文明社会の未開社会に対す勝利を示す。V. 394-397 の父の病の回復を喜ぶ子や XXIII. 233-240 の難破した人が陸に辿り着く喜びの直喩は主人公の将来を予知している。他方、VIII. 523-531 の町を滅ぼされた女の嘆きや XIX. 104-114, XVI. 175-216 などの直喩は過去を写し出す機能を果している。しかも直喩のこれらの諸機能は同時にオデュッセウスの苦しみや喜びの感情を高めながら物語を展開させたりまとめるのに役立っている。なお、最

近 J. Griffin (*Homer on Life and Death*, Oxford 1980) なども両詩の象徴的表現の重要性を指摘している。

最後の第五章は直喩がオデュッセウスの性格描写に重要な貢献をしている事実を指摘する。鳥の直喩は色々と使用されているが、中でも驚のそれには特別の意味が付与されている。イーリアスには四回程あるこの用例もオデュッセイアーでは XXIV. 537-538 の一回のみである。しかし、驚は予言や前兆にしばしばあらわれており (e.g. II. 146-154, XIX. 538-551) こうした背景を考慮すると上述の直喩には主人公の帰国と求婚者に対する勝利の意味が込められていることが分かる。

イーリアスでは主にパトロクロスとアキレウスの友情に係わっている親子の直喩は、オデュッセイアーではテーレマコスを始めとして (e.g. I. 308, II. 47=234, V. 12, 394 etc.) より広範囲に用いられているが、主にオデュッセウスの家族への思慕の情を示すのに用いられている (e.g. X. 410-415, XIV. 174-177 etc.)。

最後に詩人の直喩について論じている。オデュッセイアーには詩人への言及が多々見られる。詩人が尊敬される (e.g. I. 370-371) のみか歌自身も尊敬されている (e.g. VIII. 580) し、主人公も詩人を尊敬している (e.g. VIII. 477-481, 487-491) 上に自らも詩人に比せられている (e.g. XI. 367-369, XVII. 518-521)。またクライマックスとも言える弓引きの場面 (XXI. 404-411) にも用いられている。詩人は歌の対象である *κλέος* を得た人と同時に歌人であり英雄であるオデュッセウスの性格も描き出しているのである。すなわち、オデュッセイアーでも直喩は重要な役割を果し

ているのである。

以上の要旨から分かるように本書の議論は説得的であり随所に有益な着想が展開されており、今後とも直喩研究の基本書の一つとして長く読みつがれていくと思われる。本書の研究成果を素直に喜びたい。

しかしながら本書の評価とは別に、ホメロスの直喩をめぐる問題がここで全て解決したわけではないことは言うまでもない。本質的な問題は依然未解決と言って良い。

叙事詩の本質とは何かと大上段にかまえるのは控えるとしても、ホメロスの詩にはなぜこうも多くの直喩が展開されているのであろうか。直喩は叙事詩にとって不可欠であるばかりではなく、そもそも人間の認識能力の発展過程においてかならず通過しなければならなかった里程標なのであろうか。それとも、単に詩人達によって代々口承されていった一つの型に過ぎず、叙事詩の本質とは何等関係のない問題なのだろうか。こうした問いに対して未だ全ての人々を納得させる回答はない。このように考えた時、本書は II. X. の直喩を後期のものとして全く考察の対象外に置いたのは甚だ残念である。

ともあれ、今後直喩の研究には一つの質的な飛躍が求められているように思われる。